

いの流水俳壇

松尾 満津於選

「当季雑詠」

紅茶のむ春灯少し遠ざけて

岡本とも子

(評) 椅子に腰かけて紅茶をのんでいる。この春灯はテーブルの上に置いたスタンドの灯であろう。前に手をのばして紅茶をのむ目の位置から少し遠ざけて、気持ちをおろちつかせているのである。さりげなく詠んで、情景に共感のもてる句である。

草も木も芽ぶかんとして山匂ふ

吉良 芙美

(評) 春の光、野の光馥郁とした春の山、草木の姿そのものが眼前にいつぱい見えて呼吸しているのである。早春の自然の息吹をとらえて絶妙、草木は移りゆく季節に少しずつかに生命をゆだね、少しずつ姿かたちを変えてゆくのである。

吾が過去をすべて知りたる古籬

森元二美子

(評) 作者の過去を詮索するつもりはないが、過去のすべてを知りつくす古籬といえは、作者は養子娘であるのか、あるいは

嫁入り道具のなかに加えて持参したものが、どちらかであろう。いずれにしても大切に保存され毎年飾られている格式のある家柄で、人も雛も大事にされている様態が想像できる、あからさまで、そのあからさまの中に心が込められた句。

癒さるるナースの笑顔木ノ芽晴

榊原喜美子

(評) 句の作者はナースではないが、何らかのかかわりのある第三者で、ナースの仕事振りを見ているのである。ナースの担当する患者は病状が快方に向かい大きなよるこびを感じている。冬の寒さから解放され、心の限りを尽くして介護したナースのホッとした様子が句の裏打ちとなっている。癒やされた笑顔がすなわち木の芽晴につながる。

春ちかし画鋏ばかりの掲示板

間 浩太

緑色の老人がいて畑打つ

大西 昇月

出不精の出端を挫く春の雪

竹崎 光子

幸せは程々で良し福寿草

片岡 包女

折鶴に呼吸を吹きこむ春浅し

森岡 照月

音もなく来て初蝶の黄をゆらす

刈谷 志津

加齢なき籬の横顔灯をともし

友草 水月

旅立ちの娘が残しゆく紙籬

大川 節弥

初雛加賀友禪を召してをり

松岡きよ子

寒桜咲いて個展の道標

川村 博子

椿落つすとんと郵便受に音

津田 久美

退院の一步に句会下萌ゆる

川上こよね

人生の苦楽分ちし春炬燵

川村千凵子

桐田跡成木となり杉花粉

筒井 眉躬

うどん打つばあちゃんたちに春隣

渡辺万利子

風邪癒えて五感戻りし夕餉かな

中野 好子

日脚のぶ改札口に乳母車

大西みどり

初物と土筆炒めを盛る女将

井上 郁子

春暁や笈の水も逆る

楠目 哲郎

春愁の顔おいて来し美容室

伊藤 たみ

まなうらに椿焼き付け野地ゆるく

中屋 桜子

裸木の薄紅さして春近し

弘瀬うき子

芍薬の赤き芽出揃ふ空に向け

川村 愛

日脚伸ぶ十本の指やわらかし

筒井 文

節分や鬼追う声も聞かずなり

藤田 里野

黒髪に通す指櫛春の風邪

松尾満津於

次 題 「当季雑詠」五句
締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎867-2133

■訂正とお詫び

4月号で大川節弥様の句が間違っていました。正しくは

鋭角に寒夜を切りて翼の灯

です。訂正しお詫び申し上げます。

企画課

平成17年度

こども川柳年間優秀作品

入選作品

・最優秀賞

勉強は目ひょうあればできるんだ

伊野小4年 弘井 七帆

・優秀賞

手の中にほたるの光あたたかい

中追小5年 中岡 奈々

つゆになりころにあめがふってきた

伊野小5年 壬生久実子

コスモスがやさしくゆれる風の中

清水第一小6年 山中 美佳

・入選

あそぶとき みんなとあそぶ すてきな子

神谷小1年 ひろせ まさき

くだいなかサントクロース これるかな

下八川小2年 そが あすか

ともだちとけんかをせずになつてくろう

神谷小2年 坂本 志織

うさぎさん とんでばかりでたのしそう

神谷小2年 鎌倉 文哉

休みの日 みんなの笑顔思い出す

神谷小4年 細木 直輝

秋になり 緑の山が ころもがえ

清水第一小5年 筒井 達朗

※学年は、平成17年度中のものです。